



編集委員退任にあたって

2013年の3月よりMWGの編集委員を4年間担当し、今年の3月で退任となりました。MWGは会誌編集委員会の会員サービス専門のWGであり、主な仕事は皆様からのコメントである「会員の広場」、会議レポートや書評の閲読です。委員となる前は、会員の広場にはほとんど目を通しませんでした。委員になり読んでみると、読者の皆様の率直なご意見や感想が書かれており、なかなか興味深い内容でした。特に特集を企画した方、実際に記事を執筆した方にとっては、読者の感想が把握できる、フィードバックができる重要なページだと思います。記事に携わっている委員の皆様は、すぐには実現できないご意見やご要望もありましたが、反映できるものはすぐに次の記事で取り入れるよう努力を行い、その姿には読者の皆様に読んでもらいたいという熱意を感じておりました。

最後の1年は主査として編集委員会の本会議に出席させていただきました。この本会議は毎回楽しく、思い出深い会議でした。委員の皆様はなかなか個性の強い方が多く、面白い着眼点の意見が飛び交い、白熱した議論をととても楽しく聞いておりました。細部に渡る強いこだわりがまるで職人を彷彿とさせます。

委員会の皆様の、読者に興味を持ってもらえる記事、読んでもらえる記事の作成に尽力する姿を見て、こういった努力の結果、会誌が作られるんだなと分かりました。一番驚いたことはなにより委員の皆様のコネクション力や人望です。何か面白いテーマがあった際に、記事を書いていただける著者をその場で推薦し簡単に内諾を取る姿は、凄い一言でした。人とのコミュニケーション能力が低く知り合いが少ない私には、到底真似ができません。そんな委員の方々が、記事を執筆していただく著者を巻き込み、1つの会誌を作っていくさまは楽しくもあり、大変だなと毎回感じておりました。

この4年の間に、塚本編集長のご尽力の結果、会誌の内容や雰囲気が大きく変わり、読んでみたい内容、親しみやすい内容が増えたように感じております。本誌は学会誌という本の性質があるため、あまりにも軽すぎる内容は憚られ、また、固い内容が多いと読者に読んでもらえないという、絶妙なラインを模索するのが大変なようにも思います。会誌の内容や方向性は、編集長や編集委員によって大きく変わりますが、これから、新しい委員の方が会誌にかかわることで、会誌がどのように変貌し、進化を遂げる姿を見るのが楽しみです。退任後は一読者として、会誌を読ませていただきたいと思います。

(高橋ひとみ/日本アイ・ピー・エム(株)東京基礎研究所)



編集委員退任にあたって

この3月で4年間(そのうち幹事を1年間、主査を1年間)務めさせていただきました本誌の専門委員会 基礎・理論分野ワーキンググループ(FWG)の編集委員を退任いたしました。「世の中には2種類の間がある。"情報処理"を読む会員と読まない会員だ」という格言があるとすれば、2013年4月に編集委員の任を拝命したときは間違いなく読まないほうの会員でした。思い起こせば会誌を読まない私が会誌の編集委員を務められるのか、と思った記憶があります。

編集委員の仕事は、毎月行われるワーキンググループの会議で、さまざまな分野の第一線の研究者兼編集委員の方々と記事を企画し、どのような技術がトレンドなのか、どのような記事を載せると読者の興味を引くか、という議論をし記事を担当します。幹事・主査になると、記事案を本会議に持っていき、雑誌全体の観点からふさわしい記事かどうかを議論し会誌を作っていく、といったものです。私がワーキンググループで主査を務めさせていただいたこの3月までの1年間では、6月号「解説：プログラミングをするプログラム—自動プログラム作成最前線—」、8月号「特集：SAT技術の進化と応用〜パズルからプログラム検証まで〜」、10月号「特集：人工知能学会共同企画—人工知能とは何か?」、11月号「解説：データの形が教えてくれること—トポロジカル・データ・アナリシスとその応用—」、2月号「解説：観光情報学の最前線—観光の分散化と個人化を促進する集合知活用情報技術—」といった解説・特集記事をワーキンググルー

プの皆様へ企画いただき、無事読者の方々にお届けすることができました。ほかに紙面に載らなかった記事案・これから載る記事もありますが、ワーキンググループに参加していただいたすべての編集委員の方々に、この場を借りて御礼申し上げます。

さて編集委員として最新技術を読者の皆様にお届けする立場になると、会誌が目指す「最新技術を分かりやすく解説する」ことの難しさを思い知らされます。最新技術を第一線の研究者の方に解説していただくわけですが、最前線で研究されている方はその最先端の技術の価値に重きを置くため自ずと専門的な記事になりがちです。一方、本会のカバーする技術分野は広いため、幅広い読者に読んでもらうためにはある程度平易に、俯瞰的に書いていただくざるを得ません。「最新」と「分かりやすさ」のバランスをとり、それを著者の方と共有するのも編集委員の役割であったと思います。

ところで、会誌は一般の雑誌と違い、記事が面白くなかったからといって発行部数が減るわけではありません。手を抜こうとすればいくらでも抜けます。毎号同様の構成で記事の中身を入れ替えれば雑誌としては成立するわけですが、本誌では通常の企画以外にも「ユニティちゃん紙飛行機」「連載漫画:IT日和」「人工知能学会共同企画」「情報処理学会公式LINEスタンプ」といった一風変わった記事を企画したりします。読者の方には好評だったり不評だったりして、必ずしも編集側の意図した通りに伝わるわけではないのですが、研究者としての遊び心を刺激する、今まで読んでいなかった会員の方々にも雑誌を手にとっていただくといった役割も含めて、今後も新たな紙面作りにチャレンジし続けていただければと、一読者として願ってやみません。

(長野 徹/日本アイ・ピー・エム(株)東京基礎研究所)